

上島の文芸

弓削短歌会【弓削】

連日の猛暑の終わり告げること彼岸の雨は秋をつれくる
福原 洋子

温暖化のもたらす魔法青森沖にえんやわんさとマ
ンボー揚がる
松本 悦郎

日々草百日草にはげまれ猛暑の夏を共に生きぬ
安川 二三子

両端より順に伸び来し生名橋つながりて優美防災
の日に
和田 綱郎

最近はお見掛けしない二千円札わが家のタンスに
三枚動かず
石田富美子

坊主地獄血の池地獄の何丁目か知らぬがバスのひ
た走りゆく
上村美智子

北陸の空路の視界果てしなく富士山くつきりと雲
海に浮く
島田 義治

突然にドルフィン水面を蹴り上げて又何処へか消
えてゆきたり
地元 静子

それぞれの顔思いつつ七本の歯刷子揃える七色に
して
橋本喜代子

威勢よししろ顔くら顔とりまぜてひ孫十人揃い来
真夏
平川 房子

双葉吟社【岩城】

暑さにも耐えて歩きの健歩かな

児島 泰

恩田川流れ静かに虫の声

訪う人もなき古戦場虫の声

紅さして齢に負けぬ敬老日

虫の声心あずけて眠りけり

秋の浜飛び込み台のポツネンと

母と子の内緒話や虫の声

大水車廻るリズムや虫の秋

せせらぎに浮き立つ虫の外湯かな

日めくりに力湧くなり秋に入る

伊佐 幹男

田中 華丘

林 七重

古林 幹枝

山元 征子

森本 和佳

田名後 望雨

幸本 孤燈

美濃部 妃苗

岩城中学校 村上雄祐さん

ゆうすけ

標語コンクール 金賞受賞

動物の

住む環境は

人間(ひと)しだい

9月12日(日)、東京都上野動物園で第35回動物愛護に関する標語コンクールの表彰式が行われ、岩城中学校2年生の村上雄祐さんの作品が、全国審査入賞作品の5点に選ばれ、社団法人日本動物園水族館協会会長賞(金賞)を受賞しました。



西予市宇和文化の里

第20回俳句フォーラム

《秀作》

◎六月の雨に打たれて登校す

弓削高等学校1年 越智 大貴

◎密やかに背比べするばらに添ひ

弓削高等学校3年 浪切 航太

《佳作》

◎太陽の光を返す薔薇の花

弓削高等学校1年 小林 佳博

◎太陽の力授かりばら紅き

弓削高等学校1年 小林 佳博

◎お似合いの赤きばらあの子に贈る

弓削高等学校1年 蓼原 彰吾

作曲家・ピアニスト 渡辺雄二氏 表敬訪問

9月1日、作曲家・ピアニストである渡辺雄二氏(43)が上村町長を表敬訪問されました。

渡辺氏は、『国民宿舎ゆげロッジ』から見る松原海水浴場の白砂や県の名勝地に指定されている法王ヶ原、青く広がった燦灘など美しい景色に感動し、よく弓削島に足を運ばれているそうです。

また、渡辺氏は数々の名曲を生み出していますが、その中でも『国民宿舎ゆげロッジ』での時間は、次々とメロディが浮かんでくることでした。



かみじま歴史探訪

郷土の先輩たちシリーズ⑨

海員組合を創った男 濱田国太郎の生涯



濱田雷声顕彰の碑

平成十九年（二〇〇七）年三月十日、

新神戸駅にほど近い六甲山麓の雷声寺で、「濱田雷声顕彰の碑」の除幕式が執り行われた。記念碑（写真）の上部には、丸い輪のようなものが刻まれている。これは

は大型の外航船舶を象徴する舵輪と仏教界の法輪を合わせたもので、碑文と共に、吉井良久（第五世雷声寺）住職の起案でした。

「明治六年愛媛県生名島に生を受け、十六歳、神戸にて国際船員となる…大正十年、日本海員組合長（実は副、のち昭和二年に組合長）に就任、安部磯雄・鈴木文治等日本有数の労働運動家と親交を保ち、世界労働会議にも海員代表として出席、活躍。昭和に入り、一転、組合を引退、僧侶となる。昭和十年、讃岐金刀比羅宮より金毘羅大権現を参拝し、船員供養、航路安全、水難防止、そして日本海運発展を祈願して、六甲おもて神戸布引のこの地に、雷声寺を開山。濱田国太郎雷声和尚、海上関係者十万人から慈父として仰がれ、八十五歳の生涯を成就し、昭和三十三年遷化…」昭和十年、郷里の生名村の厳島の丘陵上にも、国太郎の銅像が建立され、厳島は見事な公園として整備された。すべてが海上労働運動に集った仲間たちによるものでした。

国太郎の生涯は、波乱に満ちたものでした。ま

ず、幼いころに両親は離婚。父は兵庫県下で就労中のため、祖父母に養育され、義務教育も満足には終えないうちに船員となっている。『海上労働運動夜話』（村上行示、成山堂出版）を見てみましょう。

「明治十八年、十二歳のとき帆船為朝丸の給仕となり、明治二十一年、汽船小杉丸に石炭夫兼火夫として乗り組み…以後、浜田は英国汽船ブルガン号、ノルウェー汽船クリム号などの汽缶番を経て、明治二十六年、日本郵船会社に入り、門司丸、若狭丸、佐渡丸、宮崎丸に火夫長として転乗した。」

『顕彰の碑』と『夜話』では、郷里を離れたときの年齢が異なっている。小学校の学籍簿は明治三十八年の同校の火災で焼失しているため、就学状況は分からない。ただ、全日本海員組合長であった国太郎を副組合長として支えた堀内長栄は次のように語っている。

「文字は全く読めなかった。小学校は二年くらいまで行っただけだが、彼が自分の名前を書くのを見た者は誰もいない。…しかし、濱田は一向にこれを恥じる気はなく、部下に対して『お前らは手帳に書くからいかなのだ、俺は頭のノートブック（ブックの意）に書く』といって記憶力のよいのを威張っていた。」

明治維新以後、日本の近代化は急速に進み、船長や機関長などの幹部船員を育成する弓削村外一ヶ村立の弓削海員（のち商船）学校等も開設された。しかし、「土官」と呼ばれた幹部船員以外の普通船員は、異なった状況下に置かれていた。遠隔操作も採用されていない船底で高熱にさらされながら、石炭を投入する火夫の作業は地獄のよう。傷病率も高かった。

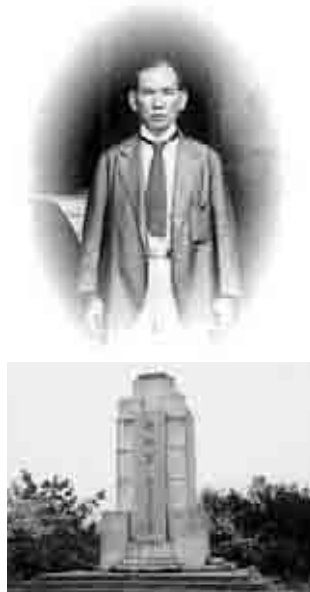
日露戦争前後には、日本郵船会社の火夫長として勤務していた国太郎たちは、仲間と一緒に機関部同志会を組織して運動し始めた。仲間の一人、醍醐祐次郎の懐旧談は次のよう。

「あのころの船員の待遇なんていうものは、言語同断…機関部などときたら、石炭船の時代のことだから…同志会の会長になった濱田国太郎さんは二十

歳頃に二、三年英国船に乗った経験があつて…同志会を作り上げたのが明治四十二年十一月…」『風浪―全日海覚書』山口勝弥、成山堂出版。外国船に乗務中、労働運動に目覚めたのかも知れない。醍醐の談話は続く。「同志会の旗上げと同時に、賃上げ要求を郵船を目標に出した…しかし、その返事は調査中一点ばりで、二ヶ年以上も続いたので、海員が大変な憤慨で…」

明治四十五年四月末に、横浜港から出航予定であった十数隻の汽船の火夫たちは一斉に下船。その中枢にいたのが国太郎でした。結局、国太郎は当年の治安警察法によって拘引され、争議は失敗。濱田は職を失いましたが、労働運動は継続します。

大正元年八月には、鈴木文治を中心にして友愛会が組織され、急速に社会運動が進展。国太郎たちも友愛会に参加。大正十年には全日本海員組合が発足、国太郎は副組合長、やがて組合長に就任。昭和六年には日本労働組合総評議会が結成され、翌年、日本労働組合会議に発展、国太郎がその議長に就任。ILOの国際労働総会にも、数回、日本の労働側の代表として出席、国際的にも活動したが、早々に退職、雷声寺の住職として、生涯を終え、この寺院に葬られた。（写真は拙著『海父・濱田国太郎―海員組合を創った男』海文堂出版より）



写真（上） 濱田国太郎

（下）残された台座

弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授

村上 貢 稿